

# 生きられた歴史空間としての〈古代〉

丸山 隆 司

たとえば、古代史を調査すると、必ずといっていいほど〈渡来人〉に遭遇する。しかも、そのばあい、朝鮮半島からの〈渡来人〉があらわれる。だが、文学の領域になると、これら〈渡来人〉の影はほとんど見えてこない。この落差はどういうことなのだろうか。古代文学研究においても、最近東アジアというチームが使われだしているが、しかし、そのばあい、多くは中国を中心とする領域をさすように思われる。それは、おそらく、比較文学研究が、中国の漢詩文と比較という枠組みによって成り立ってきたことと無関係ではない。東アジアという領域設定の枠組みは、戦後の歴史研究において、おもに、京大学派によってつくられてきた。それは、戦前の大東和共栄圏という政治的文化的な枠組み設定に対する見なおしを意味するし、それ以来、〈帰化人〉は〈渡来人〉という名称で呼ぶべきだという流れが産出された。しかし、こうした歴史学の流れを文学研究は、そのチームの変更だけを受け入れ、その内容については従来と変えなかった、と思われる。たしかに、朝鮮半島を対照して論じるには、テキストひとつ取り上げても困難なことが多い。しかし、それだけがこうした排除の理由なのだろうか。東アジアという領域設定において朝鮮半島を空白としてみることは、もしかすると、柳田民俗学がつくりあげた南島への（からの）視線に忠実なのかもしれない。七十年代の古代研究におけ

る南島への視線は、柳田一折口の視線に添っていたことは間違いないだろう。その柳田一折口民俗学の視線が朝鮮半島を空白として排除していることがイデオロギーであることがあきらかなのだから、古代という歴史空間をとらえなおしてゆくのに、朝鮮半島という、そして、〈渡来人〉という概念を検証しなおしてゆくことは不可欠であると思われる。しかし、東アジアという領域設定は、そこに存在した日本や中国・高句麗・新羅・百済という個別の国家間の諸関係を問題にするという以上に、その境界がどのように成り立っていたのか、あるいは成り立ちえていたのか、という、いわば、境界そのものの問題として問われなければならない事柄のように思われる。いいかえれば、言語や文化を個別国家の枠組みで切り取ることを、そうした切斷が近代の国民国家の枠組みの投影でしかないことを踏まえたうえで、古代を問いなおしてゆくことでなければならぬだろう。それは文学の問題なのか、という疑問の声が聞こえてきそうだ。表現論や発生論は個別言語の完結性を前提に理論化されてきた。しかし、個別言語そのものが言語という抽象の分割でしかないのではないか。日本語とか中国語とか朝鮮語という個別言語が、その個別性を獲得して行く過程そのものが境界画定であるとすれば、問題のアナロジーはあきらかではないだろうか。